コミュニケーション紀要
Vol. 32, pp. 1-14（2021 年３月）

エスノメソドロジー研究は，「三人称」の現象学なのか －「実践学」としての「観察社会学」序説－

岡田　光弘（成城大学・非常勤講師）

目　次

はじめに　2頁
１.「観察」の基底性　3頁
２. 文脈依存性からアカウンタビリティへ　5頁
３.「三人称」の現象学へ　6頁
４. エスノメソドロジー研究：「事実」を確定していく方法の研究　7頁
５. 自己組織化とアカウンタビリティ　8頁
６.「実践学」という道　9頁
７.「実践学」を可能にする現象学　11頁
まとめ　12頁

はじめに

現象学は，「一人称」の経験をありのままに扱うものだと考えられている．そして，エスノメソドロジー研究は，A. シュッツの影響下にある現象学的な社会学であると考えられている．だが，エスノメソドロジー研究の系譜に属する「相互行為（会話）分析」においては，分析の対象となっている書き起こしの登場人物に，その意識経験を尋ねることはない．また，人々の用いている概念とその使用の実践を扱う「概念分析の社会学」においても同様に，「一人称」の意識経験は登場しない．この研究ノートは，エスノメソドロジー研究についての未翻訳の著作（Garfinkel 1967, 2002, Lynch 2002, Lynch & Sharrock 2003, Anderson & Sharrock 2018）の内容の一部を編集し，並べ替えることで，そうした違和感に対するアカウント（理由説明，言い訳）を成型する試みである．とはいえ，この研究ノートは，具体的な事例に乏しく，常に事例に基づいて考える習慣を身につけている読者には，一種の連想ゲームに見えるかもしれない．幸運にも，以下に示したような鍵となる概念の配置が，結果として，何らかの像を結んでいればと願っている．

さて，歴史を遡れば，H. ガーフィンケルと学問との出会いは，ありきたりの商取引を題材とした会計学（アカウント）を学ぶことから始まった．社会学徒として T. パーソンズのもとで学んでいたガーフィンケルは，A. ギュルヴィッチとシュッツから現象学の発想を借りることで，知の巨人，パーソンズが見逃していた新たな社会学の可能性を見出した．彼には，その道筋を遡ることで，E. デュルケムの社会学の読みかえを行なうことさえ可能になった．この旅程の中で，人々が，周りの皆と同じように「観察」を行い，社会生活の基底となる「事実」を積み上げ，それに依拠して秩序を自己組織化していく「方法」を解明しようと，現象学を深く「誤読」することにより，社会現象の詳細という大きな鉱脈を発見することになる．そして，同時期，エスノメソドロジー研究という新しい社会学のあり方を彫琢していく過程で，H. サックスを経由して，後期の L. ウィトゲンシュタインの思想を取り入れた．彼が，意味の過少決定といういわば人工的な難問を「解消」した時，その鍵となったのが「アカウンタビリティ」という概念であった．人々は，社会秩序を「探索」する際に，この「アカウンタビリティ」に導かれ，「意味を組み上げ」，見通しの良いゲシュタルトを紡いでいく．このように，人々を，可視性に支えられた「三人称」の承認を受けて「事実」を確定していく，社会秩序の「探索者」と見ることは，パーソンズが見逃していた視点であり，人々の「実践」に学ぶ社会学としてのエスノメソドロジー研究の肝となる部分である．

本研究ノートは，人々が当たり前に，世界をそして社会を「観察」しているということ，そこには必ず伴う「アカウンタビリティ」を鍵として，「実践学」としてのエスノメソドロジー研究を，録音・録画を活用して，人々の具体的な活動を記述していく「三人称」の現象学と特徴づけていくための予備作業である．また，この作業は，「三人称」の現象学としてのエスノメソドロジー研究と同義語とも言え，人々の「観察」に基礎を置く社会学である「観察社会学」（Francis & Hester 2004＝2014：328f）と呼ばれる構想の一部をなしている．

1．「観察」の基底性

社会学と人類学において「参与観察」という技法が採用され，重要視されてきた．シカゴ大学の研究者たちが行なったエスノグラフィーは，シンボリック相互作用論という理論的なパースペクティブと結びついたものだった．ここでその詳細に触れることはできないが，シンボリック相互作用論は，社会学者が，その職責を全うするためのフィールドワークの中で，さまざまな社会生活について「観察」し，確固とした知見を形作ることを重要視した研究潮流であった．だが，そもそも，そこに社会学者がいようがいまいが，人は，社会のメンバーとして社会生活を営む時に，自分のまわりで何が起こっているのかを絶えず「観察」している．どのような場面であっても，そこに関与している人には，そこで十分に適切な振る舞いをするために，周囲の人の振る舞いや言葉遣いに注意を払い，その意味を理解することが求められている．このように，「観察」は，社会生活の基礎にあり，社会学に特別な技法ではない．人々は，社会生活を営むために，誰でもが目にすることのできる材料を「探索」し，周りの誰にでも利用できる形で「組織」していく．その際に，さまざまな「観察」の方法を駆使しているのである．本稿では，そうした「観察」が，「三人称」的な日常言語に媒介されて，「組織」され，「達成」されていることを確認し，それがエスノドロジー研究の肝となることを確認していく．

「参与観察」に基づいたエスノグラフィーには，社会学の営みとして，少なくとも，二重の強みがある．第一に，本当は知る価値があるのに，それまで，ほとんどの人が知らない，あるいは「気にしていない」生活様式について明らかにすることができるということである．第二に，「参与観察」に基づいたエスノグラフィーにおいて，シカゴ学派が「行為者の視点 Actor's Point of View」と呼んできた要件が満たされるという強みである．これは，社会を理解しようとする学問にとって，必須の要件であるように思われる．すなわち，「観察」によって社会的な行為を説明しようとするなら，その研究は，社会的な行為に携わっている「行為者の視点」や意味についての理解，すなわち，「状況の定義」に基づいている必要がある．さて，W. I. トマスは，「人が状況をリアルと定義すれば，その帰結においてもリアルである」という考えを提示した．この「状況の定義」という考え方は「トマスの定理」とも呼ばれ，シンボリック相互作用論の中心的な概念のひとつである．

もしかしたら，この定理は，「人が事実だと信じたり，考えたりすれば，それが事実である」といった命題と同型の，相対主義を招く物言いのように思えるかもしれない．だが，この定理は，もともと，「リアルと定義する」という社会的な行為とその帰結に至る過程について語っている．ちなみに，観察社会学における「観察」は，言葉によって明示的に「定義する」ことはしない．だが，「知る」や「見る」のような動詞と，その対象が事実であることを前提とするという「論理文法」を共有している．「観察」とは，前提としての「事実」を指し示す行為なのである．これに対し，シンボリック相互作用論においては，人々は，社会的な規範と目にしている「事実」に齟齬がある場合，さまざまな言葉や振る舞いを駆使して，状況，ないし規範を再定義しようとする．エスノメソドロジー研究は，これを具体的な「実践」として扱う．これについては，後に，「状況の中で，状況に働きかける」自己組織化として語ることになる．

自我論的 Egological な取り組みの意義は，まず，「行為者の視点」を分析の中心に据えることにある．

だが,「行為者の視点」の核心は，たんに，活動に対する説明において，行為者が，自らの「動機」や「意図」といった視点をそこに組み込むというだけのことではない．もし，たんにそうだとすれば,「行為者の視点」を，パーソンズがそうしたように一連のあらかじめ決められた規範と価値の指向として要約し，たんなるひとつの説明の変数として取り扱えば事足りるということになってしまう．

「三人称」の現象学としてのエスノメソドロジー研究にとって，自我論性は，シュッツが提起し，ガーフィンケルが継承した，安定した社会的な相互行為のための条件として有名な「視界の相互性」を産出する論理的な根拠である．「相互性」というからには，そこに「依り代」としての行為者が求められる．さて,「視界の相互性」を定式化すると以下のようになるだろう．社会的な世界の意味を理解する際に，行為者たちは，特別な事情がない限り，身の回りに素朴に存在している同じモノを見ており，もし，他者に対して望むことを自分たちがしてあげれば，他者もまた，自分たちが望むことをしてくれると，想定している．さらに，また，行為者たちは，他者もまた同じことを想定していると，想定しているのである．このような想定は，人々の「観察」を安定したものにする条件となっている．そして，読者は，このメカニズムが，ある段階から，公共性,「三人称」性を帯びたものに変質していることに気づくであろう．後に，ここで「観察」と呼ぶものを現象学に落とし込むのだが，ここで示したように，安定した「観察」には，ある種の相互主観性が組み込まれた構成になっている．

さて，社会的な行為者たちは，どのようにして自分たちの活動の，一目でそれとわかる「アカウンタビリティ」を示し合い，認識し，いたるところで見られる秩序の再産出を可能にしているのだろうか．さしあたり，社会学においては,「私」という経験を生み出す「観察」が，録音・録画が可能な「三人称」のものであり，そこで目に入っているモノは，すでに社会性を帯びていて,「私」(の経験）に先行すると考えるしかないだろう．こうした「観察」の,「周りの誰もがそのように見る」という公共的，相互主観的な性質について，Sacks は以下のように述べている．

私が提案してきたことは，以下のように言い換えることができる．すなわち，成員たちにとって，活動は観察可能なものである．成員たちには，活動が見えている．彼らには，人々が親しみあったり，人々が嘘をついたりするのが見えている．彼らが見ているのは，例えば「私の母」ではなく，彼らが「本当に見ている」ものが光であり闇であり影であり，遠くにある対象であると誤って提案されてきた．そして，それによって，私たちは，このような意味で，行動主義的であることを課されてきた，だが，成員が，どのようにして，一連の行為を産出するかを理解することによって，その人たちが何を見ているのかが分かるようになる．(Sacks 1995：119)

このような「観察」の基底性は,「一人称」として，目にしているモノが，成員としての「三人称」の社会的な世界に由来するモノであり，人々は周りの皆が見ているように，それを見ているということである．それは，身の回りの，誰でもが目にすることのできる，ありきたりの「素朴実在論」の世界，当たり前の「事実」によって成り立つ社会が，自然的な態度によって構成されており，それ以上遡れない「岩盤」だということを意味する．そして，そうした誰でもが目にすることできるモノには，常に,「ア

カウンタビリティ」が潜んでいるのである．

２．文脈依存性からアカウンタビリティへ

エスノメソドロジー研究について紹介するとき，シンボリック相互作用論の「状況の定義」の対応物である「文脈依存性 indexicality」について語られることが多い．この語自体には，「指標性」という訳語が与えられ，ある表現の意味が，状況，ないしは文脈によって多様で未確定であること，すなわち，意味の過少決定を意味するものとして理解されてきた．ガーフィンケルによる研究プログラムの根幹をなすこの概念は，「あれ」「これ」という，明らかに指標的な表現だけでなく，すべての行為や表現に伴う性質を指すものである．だが，エスノメソドロジー研究が強調するのは，具体的な行為においては，「文脈依存性」という性質は，個々の表現の曖昧さや不完全さを指すのではない，ということである．人々の実践においては，それぞれの行為は，文脈を捕まえ，さらに文脈を更新することで，「意味を組み上げ」，見通しの良いゲシュタルトをなすことで，かえって，豊かな意味を紡ぎだしている．また，この過程は，ガーフィンケルの用語で，「相互反映性」と呼ばれる．この全ての肝となる概念が，一目でそれとわかるという意味での「アカウンタビリティ」なのである．

意味の過少決定とその解決というモティーフは，社会学者に馴染みのあるものである．このモティーフは，まず，S. クリプキによる『ウィトゲンシュタインのパラドックス』において提唱され，その骨子は，ウィトゲンシュタイン派の社会学において有名な「暗闇の中での跳躍」という言葉に象徴されている．こうした意味の過少決定論は，後に科学社会学者の D. ブルア流の社会構築主義と結びつくことで，社会学の思考において隆盛となり，現在でも，この相対主義の陥穽は完全に克服されているとは言えない状況である．本稿では，意味の過少決定とその社会学的な解決という考え方をクリプキによるウィトゲンシュタイン，すなわち，クリプケンシュタイン派の考え方と呼んでおこう．

ところで，エスノソドロジー研究は，「文脈依存性」の積極的な意味合いを救い出し，むしろ，「文脈依存性」が，「意味の組み上げ」を手助けしていると考える．この流派のウィトゲンシュタイン理解を P. ウィンチの名を捩って，ウィンチェンシュタイン派と呼ぶことがある．実は，筆者は以前，「ウィンチェンシュタイン派の「観察社会学」という視点から」という副題を持つ著作（岡田 2019）を物したことがある．ただし，その元々の題名は「ウィンチェンシュタイン派・第三者の現象学である『観察社会学』という視点から」というものだった．本稿は，その続編であるとも言える．後に触れる現象学とは別の系譜に属するものだが，ここでは，エスノソドロジー研究の主要な概念である，一目でそれとわかること，すなわち「アカウンタビリティ」が，クリプケンシュタイン派の陥穽への解毒剤であるということを指摘しておく．すなわち，元々，人々の実践に跳躍はなく，相互の「観察」とそこで産出され，利用される「アカウンタビリティ」が人々の行為の連接と伴にあり，それを可能にしているのである．このように秩序があるとは，「組織」された「知覚」，すなわち，見通しの良いゲシュタルトを手にすることなのである．こうした「観察」による秩序の産出を「観察」する社会学のあり方をここでは「観察社会学」と呼んでおきたい．

３．「三人称」の現象学へ

日本の理論社会学を悩ませてきたクリプケンシュタイン派による社会秩序の問題とは別に，ガーフィンケルは，自らが拘ってきた現象を｛ ｝→（ ）と表記している（Garfinkel 2002）．社会学を代表とする，ある種の物象化を表象している．ここでは，Lynch（2002）に倣ってその図式を反転させたものを［ ］→｛ ｝と表記しておこう．これは，テキストが実際の行為に受肉化・現実化されていく過程のことで，ガーフィンケルは，こうした過程を指示・教示された行為 Instructed Action と呼ぶ．そして，この［ ］→｛ ｝と表記される過程を支え，現実化するのが相互の「観察」と行為の連接を導いていく「アカウンタビリティ」だということになる．ここではその現実化の過程を「意味の組み上げ」および「組織」という用語を用いて語りたい．現象学の用語で呼び直すなら，これは，超越論的な還元によって見出される「突破」のことである．だが，この「突破」は，「一人称」の行為者の頭の中にある「意図」や「表象」を指すものではない．相互行為の中で，誰にでも目にすることができるという意味で「三人称」として「観察」され，具体的に「達成」される過程のことである．また，本稿では，エスノメソドロジー研究を，「三人称」的な日常言語に媒介されて，意味が組み上げられ，「組織」され，「達成」された「事実」の産出を扱う研究であると定式化しておきたい．それは，自然科学の対象となるモノが織りなす世界でありながら，科学的な態度ではなく自然的な態度によって構成されていく世界を対象にする研究ということでもある．また，「三人称」というのは，エスノメソドロジー研究が，「一人称」という自我論性自体から出発するのではなく，すでに社会性を帯びている，可視的な「事実」を確定していく主観性を，社会学として，どのように「観察」していくのかから始める研究であるということである．「三人称」の現象学については次節以降の説明に譲ることにして，ここでは，現場の実践に貢献できる社会学の要件を定式化した記述を上げるにとどめておきたい．

三人称という表現の含意は，「私」という経験を生み出す「観察」の「方法」が「私」（の経験）に先行するということである．また，三人称の現象学が扱う世界には，まず，すでに，規範性，社会性を帯びた，デュルケムのモノが存在している．それは，いわゆる「素朴実在論」の世界であり，周りの誰でもが，いつでも経験している社会（世界）である．（岡田 2020：4）

ここでの「素朴実在論」とは，社会が，自然科学の対象となりえるモノからなる「事実」からなり，科学的な態度ではなく自然的な態度によって構成されていく世界が対象だということである．ガーフィンケルは，「一人称」によって捉えられる意識や経験や「意図」，「動機」に関心をもつのではなく，可視的で「三人称」的に把握される「達成」に焦点化し，社会のメンバーが，安定したシステムを産出する準拠点となる「事実」を達成するために使っている「方法」の特徴を取り上げるという独特の社会学的なプロジェクトを開始している．この安定したシステムの産出の肝となるのが，周りの誰にでも可能な「観察」なのである．

4．エスノメソドロジー研究：「事実」を確定していく方法の研究

ガーフィンケルは，社会秩序の産出に対する独自の姿勢を言い表すために，1950年代に，「エスノメソドロジー研究」という造語をした．この用語は，彼が基礎を作ったプログラムを指す語として，人口に膾炙していく．

ガーフィンケルは，シカゴの陪審員団プロジェクトの間に得た洞察にエスノメソドロジー研究の起源を帰属させている（Hill & Crittenden 1968: 5-11, Garfinkel 2002: 80）．1953年から54年の間に，ガーフィンケルは，当時の一流の社会科学者たちと協力して，陪審員たちの意思決定を説明しようとする経験的な研究を行っている．この調査では，実際の陪審員の評決に対するテープレコーダーによる録音が利用され，ガーフィンケルは，この時に，後年，エスノメソドロジー研究として結実する主要な洞察をえた．エスノメソドロジー研究は，その胚胎期から，研究対象を「三人称」の立場で「観察」していたのである．

社会の人々にとって，社会は，個人を超えて不動でありながら，意味に満ちたモノによって満たされている．自然科学の対象となりえるモノからなる「事実」は，さしあたり疑われることなく，客観的で有意味なものとして立ち現れている．エスノメソドロジー研究にとって，知覚された「事実」は，研究者の理論による構成物ではなく，ある特定の状況において，その場面の参与者たちが，さまざまな「方法」により，「状況の定義」と相関的に「探索」を行い，協同的に発見していく「達成」なのである．知覚され「組織」された「事実」を作り上げる具体的な「方法」を探究するエスノメソドロジー研究は，元々は，陪審員たちが，自らの「観察」を材料に「探索」し，誰でもが認める常識による選択を経た法的な「事実」を確定していく「方法」への関心から考えだされた研究手法であった．これについて，ガーフィンケルは，以下のように言う．

［陪審員たちは，判断を］相対立する主張が常識モデルと整合的かどうかということを検討することによって行う．…一貫した意味を成すならば現実に起きた出来事として考えられてよい，という基準でこの検討がなされていく．その解釈が理に適っているならば，それが起きたことなのである．（Garfinkel 1967：106）

法研究にたずさわった後，ガーフィンケルたちが行ってきた研究は，科学や数学といった研究の活動が生じる特定の場に関するものである．その対象は，それぞれの現場の，周りの誰とでも共有できる経験の「組織」，すなわち，方法による達成としてのワークである．彼らが，強調してきたことは，知覚される「発見」や「証明」という「事実」の，現場における，具体的で規範的な性質である．ありきたりの「事実」は，見通しの良いゲシュタルトをなすよう「組織」され，例えば，本人の「意図」とは別に，「呼びかけ」の後の「無音」は「無言」とされる．さらに，同じ「無音」が，文脈と響きあい，規範的で，社会的な意義を持つ「無視」や暗黙の「承認」という「事実」として知覚され，「達成」される．

５．自己組織化とアカウンタビリティ

さらに時代を遡ろう．ガーフィンケルは，家族が経営していた小売店経営という道に進むように運命づけられているように思っていた．だが，ユダヤ人隔離政策の副産物とも言える機会を得て，地元の大学に進学し，コロンビア大学の英才たちによって教えられていた「アカウント（会計学）に関する理論」のコースを履修した．そのコースは，実用主義的で，それほどは数学の素養のいらないレベルのものであり，通常の商取引を，標準的な会計学（アカウント）の様式という観点から分類するというものであった．後年，ガーフィンケルが，社会的な行為と社会秩序に関する「一目でそれとわかるという意味でアカウンタブルな」性質という，その主要な論題のひとつを展開したのは，このように具体的で，堅実な形で，会計学（アカウント）に触れたからだと考えられる．ガーフィンケル（1967：vii）にとって，「一目でそれとわかるという意味でアカウンタブル」とは，「目に見える形で理に適い，あらゆる実践的な目的のために報告可能」であることであり，より簡約化した表現では，「観察可能で，報告可能」なことである．記録の保存という観点から見ると，「アカウンタビリティ」の「達成」は，行為と出来事を，常識による選択を経た標準的なカテゴリーに割り振るという，その都度の即興的な実践によるものである．これは，後々，自分たちの組織的な実践について正当性を擁護することが可能な記録を維持管理しているとも言えるだろう．だが，そのような実践上の意義を持つ記録は，社会学者が，実際の組織的な活動を再構成するための「データ」として用いられるときに怪しげなものとなってしまう．後年，この事実に気づいた時，ガーフィンケルは，一目でそれとわかるという意味での「アカウンタビリティ」という領域を拡張したのである．これは，意味の過少決定という人工的な問題を無効にするワクチンの発見である．すなわち，「アカウンタビリティ」による導きを行為の接続を可能にしている全ての資源を指すように拡張したということである．「アカウント」という活動を役所の記録の維持管理といった領域をはるかに越えるものとしようとしたのである．相互行為分析のような，その瞬間，瞬間の活動に関する研究では，この「アカウンタビリティ」には，「ええと」とか「う～ん」といった言いよどみなど，語彙ではない，些細なものも含まれる．行為の連接を生み出す全ての発話，あるいは，活動のある当事者が，自分たちが，どのようなことを行っているかを示すという意味で，視線の向きや動き，そして身振り，さらには物的な配置といったものまでが，ここに含まれるのである．

人々は全ての資源を駆使して，連接を作り，行為を接続する．社会秩序はそうして可能になっている．例えば，『Perspectives in Sociology』でのエスノメソドロジー研究についての解説において，一目でそれとわかること，すなわち「アカウンタビリティ」は，「知覚」の「組織」であるとともに社会生活の自己組織化の問題として扱われている．エスノメソドロジー研究は，社会生活を「観察」の組織，すなわち，自己組織化として見ているということである．エスノメソドロジー研究の観点からは，社会学の理論は，漠然として曖昧な特徴を持つとされ，社会学の調査は，日常生活の世界に居住していながら，あたかも，この世界から身を引いて，外側から「観察」しているとされている．これに対して，エスノメソドロジー研究は，自らの社会学を，完全に日常的な世界の「真っ只中」で行われているものとして扱っている．社会学も，その素材と，知覚され，報告された「観察」を，この同じ「素朴実在論」の世界から得ていることに注目してほしい．

社会構成主義に代表される社会学は，社会秩序の問題にたいする解決策が，その都度その都度の社会的な場面または状況の外側，すなわち「観察」の外側に見出されると仮定している．たとえば，社会学一般において，人々の整然として秩序だった行為は，具体的な「観察」の外側にある，「観察」に先立つ出来事のせいであると仮定され，役割期待の社会化，または，現在の状況を制御しているメカニズムの階層的なシステムなどの何らかの外的で構造的な条件などによって引き起こされるとされている．とはいえ，社会秩序をこのように描くことは，社会的な場面の，日常的に知覚され「観察」される整然とした秩序，たとえば，バス停で人々がバスに乗車するために待っていたり，人々を見送ったり，人々が到着するのを待っていたりすることを当たり前のことと見なすことになる．通常の社会学には，そこに関わっている人々が，自分たちの行為を，お互いを含めて，周りのいかなる観察者にも，「観察」できるものとし，そのような整然としたアレンジの要素とするために行為している方法に対する関心はまったく存在しない．では，その場に居合わせた人々は，どのようにして，その日常的で標準的な「組織」に適合するために，具体的に何をするべきかを知るのだろうか．

それらの行為を，誰にでも目に入り，「観察」でき，一目でそれとわかるように産み出すことは，行為の「組織」の付随的な特徴ではない．社会的な行為の本質的な特徴なのである．それらの行為を目にした他者が，私たちが何故そこにいて何をしようとしているのかを「観察」できることは，私たちの行為に関する偶然の特徴的な事実というわけではない．私たちの行為の多くは，他者による「観察」に向けて「組織」され，または，そのために行われる．私たちの行為に織り込まれるのは，他者が，私たちの行為にゲシュタルトを見て，私たちが何をしているか理解し，行為を連接するために利用可能な何かを付与するという関心なのである．行為は，非常に広範に，他者を志向し，その人たちとの相互的な関係や協力において産みだされる．行為のこの見通しの良いゲシュタルトをなすという特性は，発話の特徴であるのみならず，視線，振る舞い，身体配置を伴う全ての行為に関する特徴となっている．

こうした関心を表現しようとする試みが，エスノメソドロジー研究に与えてきたものが「アカウンタビリティ」であり，これを担保するように行為を「組織」することである．たとえば，行為の道筋の「組織」という側面は，それらを誰にでも観察可能で，わかりやすく同定することができ，それについて容易に話すことができるようにすることなのである．ここで使われる，「一目でわかるようにアカウンタブル」という概念は，「行為に関わる人々に，これらの活動の『組織』を観察したり，報告したりすることを可能にするように『組織』されること」を意味している．このように「観察」が元になって「自己組織化」が可能になっているというメカニズムは，その「観察」を研究者もまた利用するという「実践学」を可能にしていく．

6．「実践学」という道

ガーフィンケルは，主著が出版される前の1964年に，当時でさえ，エスノメソドロジー研究のまわりに形成されつつある誤解を招くような固定観念から，自らの研究業績を区別しようと，「エスノメソドロジー研究」という名称を棄てて，「新実践学（Neo-Praxiology）」に改名しようという提案をした．その改名の候補は，マルクス主義の哲学者であるT. コタルビンスキーが，マルクス主義を，「実践学」

と呼ばれる専門科目とすることを提唱したことに因むものである．この場合の「実践学」とは，「効率的な行為に関する科学」という意味である．その改名の提案には，実は，真面目で意味深い側面がある．行為の過程の構成，すなわち，そのような行為がどのようにして「組織」され，その過程で強化され，現にあるような姿をとる行為として表現されるにいたるのか，という問題に対する，エスノメソドロジー研究の独特な関心である．この行為の過程への関心は，元々のコタルビンスキーの「実践学」が持っていた効率化や一般化への指向は別として，ガーフィンケルが，日常的な世界の出来事が，実際の状況というリアルな条件の「真っ只中」で，具体的に，どのようにしてなしとげられるのかという問題，すなわち，先に［　］→｛　｝と表記した現象への関心を引き継ぐという主張となっている．

ちなみに，ガーフィンケルによる「実践学のルール」は以下のようなものである．

日常生活における諸活動の，目に入っているが気づいていない背景は，あるパースペクティブによって，目に見えるものとされ，記述可能なものになる．このパースペクティブから，人々はその人生を生き，子どもをもうけ，感情を生き，様々な考察をし，関係に入る．これらすべてを介して，社会学者たちは，その理論的な問題を解くことができる．（Garfinkel 1967：37）

エスノメソドロジー研究流の「実践学」の対象は，ありきたりの「素朴実在論」の世界，当たり前の「事実」によって成り立つ社会，自然的な態度によって構成された「知覚」による，それ以上遡れない「岩盤」である．人々は，ローカルな現場で，その都度その都度，利用可能な資源を活用して，「意味を組み上げ」，行為の連接を可能にする見通しの良いゲシュタルトを生み出していくことで秩序を産出する．社会秩序の自己組織性の根底には，一目でそれとわかるという「アカウンタビリティ」がある．誰でもが行っている「観察」を介して，秩序が自己組織化するメカニズムを浮き彫りにし，利用可能にすることが「実践学」としてのエスノメソドロジー研究の目的なのである．

人々の実践に学ぶ「実践学」は，人々の「観察」に基づいて，社会秩序の産出を「観察」するということができるから成り立つ．通常のフィールドワークにおいては，この逆の回路が作動している．すなわち，研究者は，自分が見ているもの，聞いているものが何かを参与者に尋ねる「探求者」であり，参与者は，それが何かを尋ねられる立場にある．しかし，エスノメソドロジー研究は，人々について，これを規範を内面化し，それを頼りになすべきことを完璧に知っている存在とは見ない．人々も，その都度その都度，利用可能な資源を駆使して「実践」をなしとげる「探求者」なのである．そこでは，自分が何をすべきなのか，自分が何を「達成」したのかを一番よく知っているのは，「一人称」の自分ではなく，自分を含む「みんな」であることになる．このように研究者がそうである前に，人々も「探求者」であるとみなす態度が，人々の「観察」を「観察」する，すなわち，人々の実践に学ぶということなのである．

ガーフィンケルの「社会的な事実」に対する取り扱いも，デュルケムに対する取り扱いも，通常の「実証主義的」な発想からは，不合理なものに見える．だが，ガーフィンケルの思考方法を展開するなら，人々がそれに依拠し，具体的に「組織」し，実際に利用しているという意味での「社会的な事実」と人々

の実践に学ぶという意味での「実践学」との組み合わせは，理に適った，聡明な考えでもあることがわかる．彼にとっての現象学は，先の述べた自己組織性とそれに連なる具体的なモノの秩序，さらにはそれを関係付ける「実践学」という「獲物を追う（Following the Animal)」，あるいは「木陰に隠れた動物を見つけだす（Finding the Animal in the Foliage)」ための方便なのである．

自らの行為を，誰にでも目に入り，「観察」でき，一目でそれとわかるように産み出すことは，社会的な行為の本質的な特徴なのである．それらの行為を目にした他者が，私たちが何をしようとしているのかを「観察」できるということは，それぞれの頭の中で，行為の意味を表象するということではない．他者が，私たちの行為にゲシュタルトを見て，私たちが何をしているか理解し，実際に行為を連接することで，共同して，「意味を組み上げる」達成にたずさわっているということなのである．人々を「三人称」的な承認を受けて「事実」を確定していく「探索者」と見ることは，社会学の方法論に大きな影響を与える．観察社会学者は，秩序を組み上げる活動の「真っ只中」にいる人々が，メンバーなら誰でも目にすることのできる材料をもとに秩序を「探索」する「方法」を学び，それをアイロニー化（中傷）することはない．エスノメソドロジー研究が「実践」に学ぶ社会学であるとはこのことである．

この道は，「行為者の視点」と呼ばれる「動機」や「意図」の概念的な「理解」から始める社会学の目には入らない．また，「一人称」単数による「理解」を「一人称」複数に拡張し，そこから「二人称」，「三人称」と進めていこうとする手法からは到達できない．「理解可能性」という概念を，それぞれの場面の「真っ只中」でお互いが分かり合う，ローカルな現場でこそ作動する概念とすることによってしか辿り着けない道なのである．それは，「一人称」の頭の中の表象ではなく，録音や録画が可能な，誰でもが目にすることのできるモノを頼りにしている．観察社会学者の「観察」は，「真っ只中」での「観察」に基づいてなしとげられる．それは，「一人称」の具体的な身体を「依り代」としているが，例えば，エレベーターの前の，その場のメンバーにしか見えていない行列が，扉が開くと同時に成型されて，人々が一列で，その扉に飲み込まれていくとき，また，形式上「質問」となりえる発話が，「非難」や「依頼」として聞き取られるときに，「三人称」の観察者がローカルな現場の秩序を「再特定化」する現象学として，具体的な行為の連接の中に姿を現すのである．

７．「実践学」を可能にする現象学

人々の常識に基づいた「観察」の基底性を重んじるガーフィンケルは，科学的な知識で武装した客観的な観察者という有利な拠点を消滅させる．自然的な態度によって「知覚」される世界の規範的な性格，そして，誰でも目にすることができ，利用することができる「アカウンタビリティ」を「組織」して具体的に組み上げられた社会秩序の首位性を確認したのが，ガーフィンケルの現象学であった．度々用いられる例を繰り返すなら，ある待ち行列の具体的な客観性は，それ自身によって提示されるものであり，いかなる瞬間にも，ただ，その待ち行列の「真っ只中」で，それを目にしているメンバーによって，周りの誰にでも見て取れるように達成されている．ガーフィンケルは，自らの実践の分析・記述に有効な「観察」を「アカウンタビリティ」と伴にあり，自己組織的に秩序を産出している過程の「真っ只中に」あるものとしている．それは，当然のこととして，日常生活を送っている誰もが，「意味を組み上げ」，

行為の連接を生み出すために利用し，支えにしている「岩盤」であり，基底である．

ガーフィンケルは，しばしば，社会学的な実証主義の象徴と見なされるデュルケムの「客観的」な社会的な事実に関する概念を現象学的な語彙によって詳述している．さらに，ガーフィンケルの用いる現象学的な語彙は，具体的な事柄について，その詳細を明らかにするように寄せ集められたものである．彼が明らかにしていることは，世界，そして社会の具体的な構成物は，指向され，連接されていく行為，例えば，その待ち行列と，そのサービスに関わる，可視的で具体的な秩序の詳細によって構成されるということである．そのような具体化された行為と，それによって構成される待ち行列は，具体的な現場で個別的に達成される．これは，「三人称」の匿名的なものでもある．そのような行為は，数学を用いて説明できるような属性によって組み上げられていることは確かである．だが，「実践学」が求める「原理」は，機械的なものではない．ある待ち行列における身体の流れは，すでに行われているように，流体力学のモデルで正確に記述できる．だが，その待ち行列における身体の動きや，位置どりと自己組織的な秩序は，歯車の連動や，分子の結合の場合と同様な空間的な配列によって左右されるわけではない．その待ち行列の，秩序や結びつき，位置どりや秩序は，その場にいる人々によって，メンバーなら誰の目にも入るように遂行される．実践は，周りの誰もが「観察」できる材料を用いて，部品となる社会的な行為が連接されることによって，しかもそれ以外の何物にも還元できない形で可能になる．さらに，ガーフィンケルが主張しているように，行為と，それらの行為によって構成され，連接されるモノとは，いずれも「客観的な」事実そのものである．行列というモノは，まずは，「素朴に実在する」対象に対して忠実であろうとするという点で「客観的」であり，しかも，その場の「真っ只中」で，メンバーによって「探求」され，「組み上げられて」いる「実践」であるという点でも「客観的」なのである．「実践」学的な記述とは，「素朴に実在する」対象をどのように組み上げるのかについての記述であり，知覚され「観察される」対象が，それぞれの活動や行為の達成に向けて，どのようにして構成されるのかに関する記述である．

まとめ

以上のように考察を重ねる中で，「はじめに」に記したように，エスノメソドロジー研究の系譜に属する「相互行為（会話）分析」においても，また，人々の用いている概念とその使用の実践を扱う「概念分析の社会学」においても，分析の対象となっている（書き起こしの）登場人物の「一人称」の意識経験が登場しない理由のいくつかが明らかになったと思う．

「実践学」としてのエスノメソドロジー研究において，「三人称」の「観察」という言葉が意味するところは，他者からは推し量り難い「動機」や「意図」からなる「一人称」の経験を複数化して，社会学的な記述に組み込むのではないということである．「一人称」の経験の複数化は，個体主義を前提とする，多くの批判者たちにとって，逃れることの難しい陥穽であり，避けがたい誤謬の元凶である．本研究ノートで明らかにされたように，「観察」の基底性を鍵として，それぞれの現場で，「三人称」の日常言語を駆使して，誰でも目にすることのできる材料から，周りの人々がそうしているように，誰でも目にすることができる行為の連接として「意味を組み上げる」達成の詳細を手にすることができるなら，

それをアイロニー化（中傷）することなく記述する「観察社会学」という新たな社会学が可能になるかもしれない．

　これは，すでに行われているエスノメソドロジー研究によるエスノグラフィーや相互行為分析，あるいは「概念分析の社会学」に新たな名前を与えているだけのように見えるかもしれない．だが，人々が「意味を組み上げる」際に，誰でも目にすることができるように「知覚」の「組織」が「達成」される「方法」を「観察」するという「観察社会学」の定式化と，「概念分析の社会学」が，自らを相互行為分析をも包摂するエスノメソドロジー研究のロジックを純粋化した研究プログラムであるとした時に行った定式化，すなわち，「概念」の使用，特にその共起可能性を「記述」するという定式化との間には大きな差異があるだろう．

　また，これまで，立論の鍵として使ってきた「観察」という用語は，あまりにも視覚中心主義的であり，今後は，「観察」という用語にそぐわない「透明性」をもつ道具の使用，そして触覚や聴覚の「アカウンタビリティ」についてどう考えるかといった難問に向き合う必要もあるだろう．多分，「観察社会学」という新たな名前を与えられた「実践学」は，そうした可能性を追求するという課題を抱えていると言えるだろう．

文　献

　Anderson, R. J. & Sharrock W.
1986 Relationship between Ethnomethodology and Phenomenology.
In Journal of the British Society for Phenomenology, Vol. 16 No.3.
2018 Action at a Distance
　Anderson. R. J., Hughes. J. A. & Sharrock W.
1985 Working for Profit. Aldershot.
　Cuff, E. C..Sharrock W.,Francis D.（eds.）
1979, 1984, 1990, 1998, 2006 Perspectives in Sociology.
　Francis, D. & Hester. S.
2004 An Invitation to Ethnomethodology. Sage.
＝2014 中河・岡田・是永・小宮（訳）『エスノメソドロジーへの招待』ナカニシヤ出版.
　Garfinkel, H.
1967 Studies in Ethnomethodology. Printice Hall.
2002 Ethnomethodology's Prgramm. Roman & Littlefield.
　Hill, R. & Crittenden, K.
1968 Proceedings of the Purdue Symposium on Ethnomethodology. West Lafayette.
　Kripke, S. A.
1982 Wittgenstein Rules and Private Language. John Wiley & Sons.
＝1983 黒崎宏（訳）『ウィトゲンシュタインのパラドックス』産業図書
　Lynch, M.
2002 The Living Text: Written Instruction and Situated Actions in Telephone Survey.
In Maynard et. al.（eds.）Standardization and Tacit Knowledge. John Willey & Sons.125-150.

Lynch, M, & Sharrock, W.
2003 Editor's Introduction,
In Lynch, M.& Sharrock, W.（eds.）Harold Garfinkel. Sage, vol. 1, pp. xxi-lv.
岡田光弘
2001　構築主義とエスノメソドロジー研究のロジック
中河・北澤・土井（編）『構築主義のスペクトラム』pp.26-42. ナカニシヤ出版
2014　『Perspectives in Sociology』に見た Ethnomethodology の自画像
－「気がつかないもの」と「気にもかけないもの」－
『コミュニケーション紀要』26：31-84.
2015　『Perspectives in Sociology 』を経由して見る，もう一つの〈概念分析の社会学〉
－相互反映性という論点から－
『コミュニケーション紀要』26：31-70.
2019　「社会学 1.0」「社会学 2.0」v. s.「社会学 0.0」「社会学 1.5」
－ウィンチェンシュタイン派の「観察社会学」という視点から－
『新社会学研究』 4 ：69-81.
2020　特集：スポーツ社会学を実践学化する　特集の狙い
『スポーツ社会学研究』28(2)：3-7.
Sacks, H.
1995 Lectures on Conversation. Vol. I & II. Blackwell.

本研究は，以下の科学研究費補助金挑戦的萌芽研究の成果です。
JP20K20788「非対称的インタラクションへの対照統合的接近：触覚の現象学的社会学構想とデザイン」
JP20K20782「障害社会学の方法論としてのエスノメソドロジー：人々の経験に正対する社会学の探究」